◇　研究報告

茅ヶ崎の別荘史　　その２・洋間つき中廊下型住宅

短期大学部　川　崎　衿　子

１　はじめに

1898（明治31）年６月の茅ヶ崎駅開設は農漁村を基盤とした茅ヶ崎村（当時）の地域社会に大きな変革をもたらした。

茅ヶ崎駅開設の前々年、駅近くに外科医・須田経哲が別荘を建設し、さらに前年には歌舞伎俳優・市川団十郎が小和田地区（現平和町）に広壮な別荘を建設したが、そのことによって当時中央ではほとんど知られることのなかった茅ヶ崎の名が広まり、新駅設置が早まったものといわれる。その後、1900年代の幕開けとともに村長・伊藤里之助によって別荘誘致政策はより積極的に展開され、明治末期には200棟を超す別荘が建設された。その概況については既報に述べた[1]。

明治末期から始まった茅ヶ崎の別荘地の開発とその変遷は、その後の社会経済状況の変化とともに次の５つの時代に区分することができる。

１期　1900年初頭からの大規模別荘建設の時代
　　1898（明治31）年　茅ヶ崎駅開設
　　1899（明治32）年　南湖院（結核専門病院）開設

２期　1923（大正12）関東大震災～戦前・1945（昭和20）年前後
　　大規模別荘の倒壊と中小規模の海浜別荘の出現

３期　戦後・1945（昭和20）年前後～1970（昭和45）年代まで
　　相続問題と都市化による別荘の本宅化、宅地化・細分化

４期　1980（昭和55）年代～1990（平成2）年代前半まで
　　マンション建設・土地利用計画、開発の活発化

５期　1900（平成２）年後半以降、現在まで

第１期では富裕層による1000坪以上の敷地面積を保有する大規模別荘が多く建設された。また明治32年に開院した南湖院は経営方針として都会の上層階級の患者を優待したことから、その周辺には文化人や富裕層が集まり、茅ヶ崎の名は単なる別荘地として知られるだけでなく保養地としての性格も高まっていった。そして次に起こった関東大震災は茅ヶ崎に壊滅的な被害を与えたが、復興とともに海水浴場の整備が進み中小別荘、貸別荘が増加した。

その後、第2次大戦の戦禍を逃れて東京や横浜からこの地に疎開してそのまま居着き、別荘が本宅化された例も多い。また相続問題が広大な土地所有者を悩ますこととなり、土地の細分化、分譲化が進行した。一方、別荘地としての良好な環境は交通手段の利便化とともに大都市周辺の通勤者の需要を高め、高度経済成長期には宅地化が目立った。近年では大型マンション建設は環境保護やまち並み、景観保全、あるいは歴史、文化資源の継承の観点からの論議[2]が重ねられている。今なお大きな樹林群を残す別荘地の景観は往時の地域社会の文化と重ねてみることができる。

本報告では第2期、関東大震災後に建てられた別荘で、なおかつ現在も住み続けられている物件に焦点を当てた。とりわけこの時期の大正デモクラシー、生活改善運動とともに新しい住宅像として一世を風靡した「洋間つき中廊下型住宅」[3] を取り上げ、建設の背景、当時の住宅様態の考察を試みた。

2　洋間つき中廊下型住宅の成立

明治の開国とともに移入された洋風生活様式は上流階級から始まっていった。明治・大正期の上流社会は、その財力や家柄、格式を示すがごとく接客・儀礼用に洋館を構え、住宅のつくりの上でも生活の上でも洋風化を先導したが、日常生活では従来の和館を当てるなどの二重生活を実践してきた。

やがて、都市中間層の台頭とともに新しく出現した中流住宅では、羨望の対象である上流住宅の模倣をもとに、部分的に洋風を採用した小規模な和洋折衷住宅を実現させていった。おりからの大正デモクラシーの影響を受けて、在来日本住宅に対する批判が生まれ、プライバシーへの意識改革が必要とされ、新しい住宅の提案が盛んとなった。日本の住宅は障子を開ければ家中が一室になる構造で、部屋同士が連続しているために通り抜けが余儀なくされており、個人の平等や独立が否定されている、と個人の尊重の立場からの住宅改革が大きな関心をよんだ。

それらを背景として洋風化の採用と通り抜けを避ける新しい間取りの追求を具体化して生まれたのが中廊下型住宅である。1915（大正4）年に行われた報知新聞の住家コンペ、さらに1916（大正5）年の住宅改良会のコンペでは多くの入選案が中廊下型住宅となっている。（図1、2）これらを契機として中廊下型住宅は都市住宅の典型として広範に普及していった。

しかし、この当時の中廊下型住宅の目的が単に部屋の独立性を高めることであったとは言及できない。中廊下型住宅が、新しい住宅のモデルとなった一方で、住宅内での階級分化を明確化したものであることも指摘されている。中廊下を隔てて女

中室があり家事関連空間があることから、家族と使用人の領域を分けることを目的とし、使用人の動線を限定して家族から隔絶した下位空間が存在したことが認められる[4]。

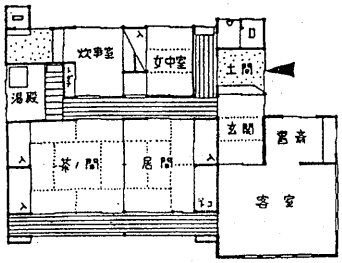


図1　1916年「住宅改良会」コンペ・1等案

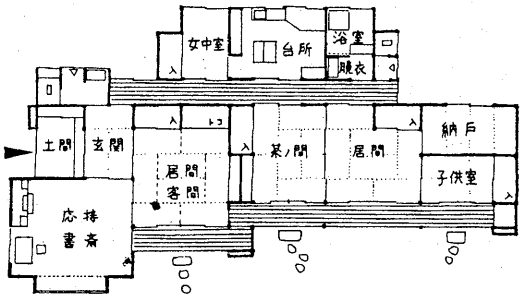


図2　同左　3等案

3　茅ヶ崎の洋間つき中廊下型住宅

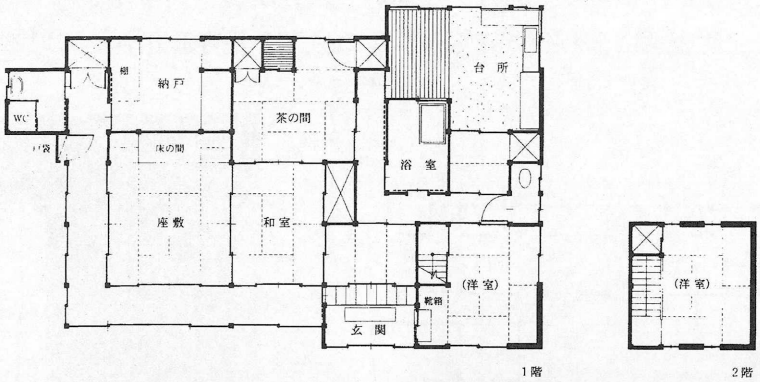
（1）Ｓｕ邸（中海岸２丁目）

前住宅は1923（大正12）年の関東大震災により全壊し、現住宅はその後に新築されたものである。現居住者・Ｙ氏の祖父は震災の犠牲となり亡くなった。前住宅時代の当初は別荘として使っていたが、Ｙ氏の父・Ｋ氏が病弱であったため東京を離れてここを本宅として茅ヶ崎に住み始めた。間もなく震災に遭遇したがＫ氏は難を逃れた。Ｋ氏はその後結婚して家庭を築き、1942（昭和17）年に長女、1947（昭和22）年に次女が生まれた。

東南の２階建ての洋館部分は外壁は一部モルタルリシン吹きの下見板張り、屋根は鉄板葺きの腰折れ屋根である。内部壁は漆喰塗りの大壁、床は１階が縁甲板張り、２階は畳敷き込みで仕上げられた。窓は和室部分と共通したデザインが施され、洋館として質の高さが感じられる。現在は１階も畳が敷き込まれている。この洋館部分は長女、次女が使い、１階は昼間の活動や勉強に、２階は就寝に当てられた。和風住宅部分では玄関から南面廊下を通って座敷へと動線が導かれている。

全体としては浴室が中央に配置され、台所廻りの納め方、設備配置など独特の平面構成、あるいは建具の意匠や、造作に高度な設計意図が認められるが、残念ながら設計者は明らかではない。中廊下型住宅の完成度から概観すると、通り抜け居室があるなど中廊下の定型とは認めがたいが、玄関脇に洋室を配置するなど大正後期の住宅の特質を備えている。

建設後約80年経たにもかかわらず、大きな改築・増築も行われず当初の姿を保ち歴史的に貴重な価値を持つ住宅である。細部にわたり維持管理が行き届き現在においても居住可能な状況ではあるが、相続上の理由から近い将来取り壊されるであろうことが予測される。



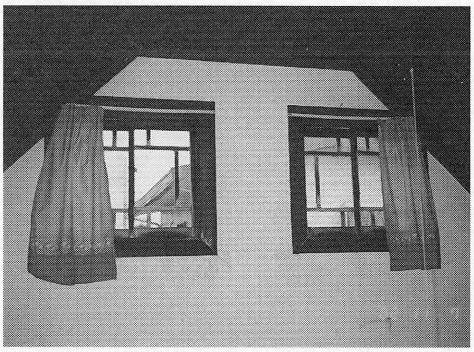


図３　1923（大正12）年直後に建設されたＳｕ邸平面図および外観・内部写真

（２）Ｔｋ邸（南湖４丁目）

建設は1932（昭和7）年頃といわれる。現在の居住者Ｃ氏の祖父が、建設半ばで行き詰まったこの物件を買い取り完成させたものである。完成当時本宅は横浜にあり、ここは別荘として使用された。やがて戦時色が濃くなり本宅が空襲を受け全焼、Ｃ氏と祖父は茅ヶ崎へと居を移すこととなった。

住宅平面は玄関脇に洋間を備え、Ｌ型に中廊下を配している。内部にＬ型廊下、南面と西面にもＬ型廊下を持つ点では、前出のＳｕ邸と近似している。洋間部分の外壁は下見板で仕上げられている。内部は漆喰で仕上げられ、窓は分銅式の上げ下げ窓で、今も使われているテーブルセット、戸棚などの洋家具は横浜の本宅から運び込んだものを現在もそのまま使用されている。

部分的な改装、模様替えは何回か繰り返されているが、大きな変更は昭和30年頃の台所と茶の間の隔壁を取り払い2室を連続させたことである。また昭和40年頃には6帖和室の南側の廊下を張り出し増築を行った。台所、浴室はたびたび改修を行っており、その詳しい記録は確認することはできない。

現在90歳にならんとする未亡人・C氏が一人居住しているが、家に対する愛着、創意工夫など住要求に合わせた変更が、この住宅を長寿命化させている要因である。

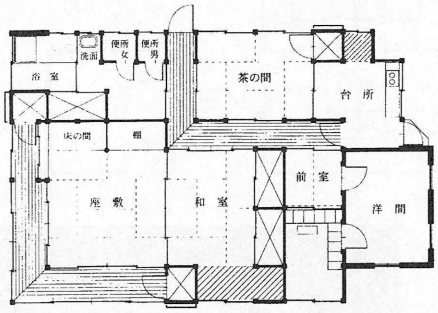


図4　1932（昭和7）年頃に建設されたＴｋ邸平面図および洋間の内部写真

（3）Ｔｍ邸（柳島２丁目）

Ｔｍ邸のある柳島は茅ヶ崎西端部にあって相模川の河口に接している。江戸時代から明治維新まで旗本・戸田氏代々の知行地で、柳島湊は江戸湾、相模湾諸港を結ぶ海上交通で賑わい、物資流通の中継点であった。江戸時代中期よりＴｍ家はこの地に居を構え、農業とともに回船業を営み財を成した。幕末期の当主・藤間柳庵は漢学を学び多くの書を残したことでも知られている。

関東大地震は震源地が相模川河口沖であったので、柳島では土地が隆起し地形は激変したと記録される。同時に水系も著しく変わり海港機能は損なわれ、海運は衰退を余儀なくされた。Ｔｍ邸も全壊し建て替えが行われた。

現住宅は1933（昭和8）年、現居住者Ｙ氏の父・Ｚ氏が施主となり西村建築事務所の設計施工によって竣工した。Ｚ氏が西村建築事務所に発注した由来については明らかではない。

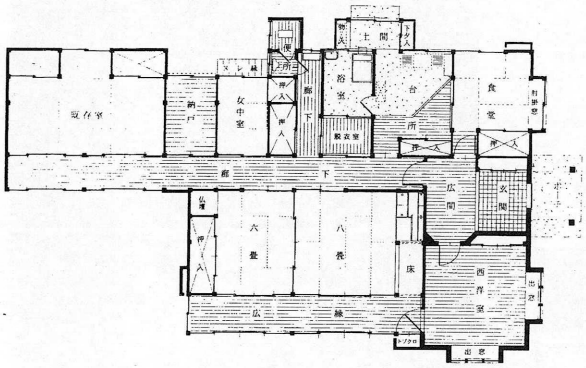
西村建築事務所の主宰者・西村伊作は、封建的で旧弊なわが国の住宅に対して改

革を唱え、1900年代初頭からさまざまな実践を試みた建築家である。また東京・駿河台に文化学院を創設し、時の進歩的文化人、芸術家を教師に招聘して自由主義、人道主義に基づく理想教育を実践した人物である。プロテスタンティズムに基づく彼自身の言動や行動によって、大正デモクラシー思潮はよりわかりやすく具体化され、同時代の精神文化形成に大きく貢献し、今日のわが国の教育や住宅に大きな足跡を残したと評価されている。

震災後に建て替えられた旧住宅の一部に接続してＴｍ邸の設計は進み、1932（昭和7）年には見積書が届けられ翌年完成した。Ｙ氏は竣工の年に生まれている。姉二人、妹一人を加えてＺ氏一家５人はこの家に住み続け、Ｙ氏がこの家を継承、現在に至っている。

既存室を西側に連続させた平面は典型的な中廊下型住宅である。中廊下をはさんで北側に台所、浴室、便所、女中室が配置され、玄関脇の大壁の洋間は西洋室と名付けられている。西村伊作の提唱した生活の洋風化は玄関脇の洋間にとどめられるだけではあるが、内部詳細では新鮮な意匠が施されている。玄関廻り、洋室廻り、建具など当時のデザイン傾向を考察する上でも貴重な資料である。

大きな改装としてはＹ氏結婚後に台所の土間を廃止してダイニングキッチンにしたこと、その後和便器を洋便器に変え、10年程前には外回りの建具をアルミサッシに変更している。また、５年程前に耐震強化工事を行い、外壁に補強鉄板を設置している。



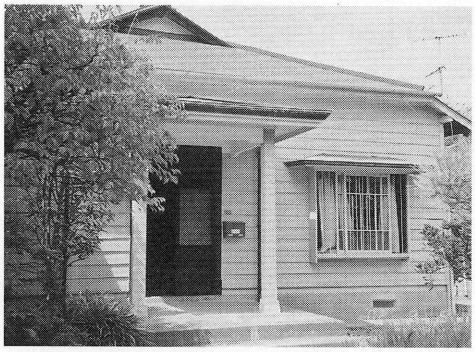


図５　1933（昭和8）年に竣工したＴｍ邸平面図および外観写真

（4）Ｎｋ邸（美住町）

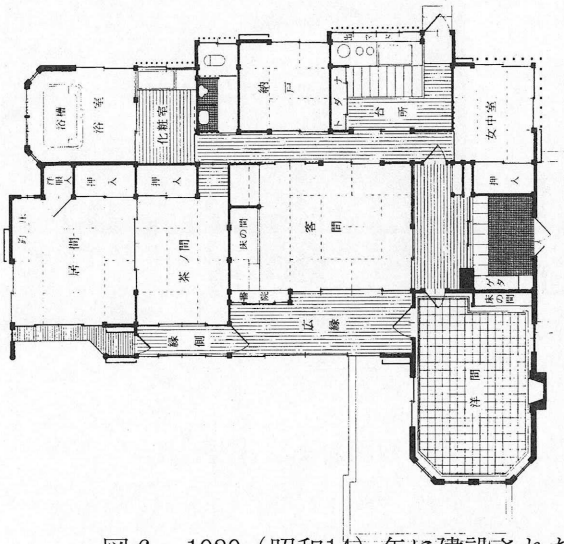
1939（昭和14）年に竣工、当時とほとんど変わらぬまま維持されている。初代当主は明治後期に東京・荏原（現品川区）で精密機械会社を創立し、軍需事業で財を成した。当主の会社所在と同じ荏原に事務所を構えていた渓恒次郎が設計を行い、逗子の大工・松井によって施工された。

住宅平面は玄関脇に洋間を備えた典型的な中廊下住宅である。南東に突き出た洋間は出隅が切り取られた形状で、外壁はモルタルリシン仕上げ、屋根は瓦葺きである。分銅式の上げ下げ窓と両開き鎧戸が瀟洒な洋館らしさを印象づけている。内壁は上部が漆喰塗り、下部の腰壁は鏡板張りで仕上げられている。

和室部分は上質材を使用して粋を集めた精緻な意匠が施され、品格の高さが感じられる。住宅の維持管理はもとより、市の保存樹林指定を受けた美しい庭園が保全され、周囲の自然環境に大きく貢献している。

建設後ほどなくして大戦の状況が深刻化し、非常事態を想定して東京の本宅の家具類が徐々に茅ヶ崎に運び込まれた。1945（昭和20）年５月、本宅一帯は空襲を受けて家は焼失し、当主一家はここに転居した。以来、当主の結婚、子どもの誕生と続き、住宅として何度かの増改築を重ねて今日に至っている。

平面図上の浴室と女中室は子どもの個室となり、浴室等は北側に増築された。また台所と納戸は改装されてダイニングキッチンへと一体化された。



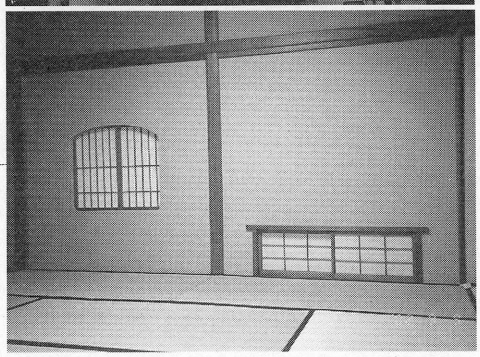


図６　1939（昭和14）年に建設されたＮｋ邸平面図と外観、内部写真

4　おわりに

本報告の物件事例は古くは関東大震災後、最も新しいもので1939（昭和14）年建設のいづれも長寿命住宅である。現在の居住者は初代が築いた遺産、住宅を血縁を絶やさず継承し、維持管理を重ねている。家を愛し、思い出を紡ぎ、自分の育った空間、環境、亡くなった家族を敬愛する気持ちが強く感じられる。しかし、今までの努力の結果が次世代に引き継がれていく希望ははかないものであることも感じられる。

住宅そのものの非能率性や性能の水準低下、現代生活への不適合などに対しては、それを乗り越えて住み続けることは可能である。一方、遺産相続や税制などの外的経済条件が顕在化した時には、住宅存続は危機に直面する。過去の例からもそのような条件が別荘地・茅ヶ崎の景観を大きく変えてきたことは明らかである。

茅ヶ崎の景観の特長は、旧別荘地あたり一帯の面影と、それとともに育った松林、屋敷林や町並みが歴史的・文化的雰囲気を醸しだしていることである。しかしこれらの多くは取り壊され伐採されて現在も次々と姿を変え、環境が著しく変貌している。個人的財産運用と公共の環境維持とは常に相反する問題ではあるが、居住者の選択に救いはないのものであろうか。

そのような思いから、著者は2001（平成13）年より地元の湘南設計監理協会、まち観まち景フォーラムに協力を仰ぎ、市内の長寿命住宅の悉皆調査を試みている。未だ住宅保存、住宅改良などに向けた実質的な成果は得られてはいないが、このような動きが居住者に「家を大切にして手入れ工夫を加えれば、長くここに住み続けていける」という動機づけの一助になれば幸いなことと考えている。また地域住民の側からも本報告に示したような長寿命住宅が茅ヶ崎の共有文化財になりうるという意識が生まれることを望むものである。

当研究調査にご理解を賜りご協力いただいた居住者の方々にはこの誌面をかりて深く謝意を表したい。

脚注

(1)拙稿、茅ヶ崎の別荘史　その１・別荘後の現況、文教大学湘南総合研究所紀要第７号、2003、pp.73-81

拙稿、茅ヶ崎の別荘史(1)別荘地の成立過程と変遷、文教大学女子短期大学部紀要、第46集、2003、pp.51-61

(2)茅ヶ崎市都市マスタープラン、1997および茅ヶ崎市都市景観基本計画、1992

(3)単に中廊下型住宅という場合が多いが、ここでは玄関脇に洋室が付随していることを強調した。

(4)平井聖『日本住宅の歴史』ＮＨＫブックス、1974

参考文献

川崎衿子：茅ヶ崎の別荘（１）日本生活学会第28回秋季研究発表梗概、Vol.28,No.1、2001、pp.24-25

川崎衿子：茅ヶ崎の別荘（２）日本生活学会第29回秋季研究発表梗概、Vol.29,No.1、2002、pp.7-10

川崎衿子：茅ヶ崎の別荘史・別荘地の成立過程と変遷、文教大学女子短期大学部研究紀要、第46集、2003、pp.51-61

川崎衿子：茅ヶ崎の別荘史・その１別荘跡の現況、文教大学湘南総合研究所紀要、第7号、2003、pp.73-81